

3日目 オフィチエンシム アウシュビッツ第2収容所 ビルケナウ-4

戦争の「事実」を伝えるということ

ツアー終了後、私は自分のペースではなく、「消化不良」の立花先生の興味にあわせて第1収容所に戻りました。

先生は1日目に回った場所を再度見直すだけでなく、入らなかった他の展示もくまなく見て回りました。とくに各国の展示がある建物は、通常はツアーで案内しない場所とのことガイドのモニカさんもあまり入ったことはないといっていました。

けれども、ポーランドやソ連の展示館を、ポーランド人のモニカさんと回れたのは、よかったですと思います。

ポーランドの戦後の話、ソビエトとの関係、いろいろな話が聞けました。ポーランド人の視点を知る、これもツアーの狙いのひとつでしたから、その目的もある程度達成できたかもしれません。

ポーランドって本当に大変な国です。しょっちゅう各国から侵略されて、なくなって、でもまた復活して。だからとってもたくましい民族なのかもしれません。

正直な話、アウシュビッツではあまり誰かを離れないようにしていました。理由は……1人で展示室にいたくないから……絞首刑になっている写真や、死体の山の写真と向き合うには正直、精神的につらかったです。実というと、アウシュビッツに来る直前に、身近な人が自ら命を落としました。それと無意識に重ねあわせてしまったのも、あるかもしれません。

その中で心に残っている写真があります。雪の上でバラックの前で息絶えている黒い亡骸の写真。

アウシュビッツが解放されたのは雪の日だったそうです。

おそらくは、の想像ですが……アウシュビッツ第1の解放時の映画は鍵が開くのをいまかいまかと待っている喜びに満ちた収容者の姿が描かれますが、

「殺人工場」と呼ばれたビルケナウは、栄養状態も悪いし、ドイツ兵が逃げ、死の行進にも連行されず現地に残された人は体も衰弱していたはずなので、相当の死者がいたと思います。

最初に解放されたときは雪が積もっていて、死者もぼつぼつしか見えなかったのが、雪がとけるにしたがって、だんだんあらわになる亡骸の山……
当然水分をふくんでいるので、死臭や腐敗も進んでいる

それが、映画「夜と霧」にでてくるブルドーザーで処理される死体の山につながるのではな
いかと思うと、想像を絶します……

その映像は、戦後のニュルンベルク裁判のとき、ナチス幹部も目にしました。
立花先生はその裁判の記録映像について、よく口にされます。
前日中谷さんとお話ししたときにも、こうおっしゃいました。
「(被告席にいるナチスの幹部が) みんな、仰天した顔をしている」

中谷さんは静かにこう返されました。
「そのとおりです。見て知っていない」

私たちもそうなのです。
ここに来るまで、
アウシュビッツで何が行われていたかという「情報」を知ってだけで、
自分の目で見て知らなかった。
当時の誰もがそうだった。
ドイツ人も、連合軍も、周辺諸国も、ポーランド人も
誰もここで起きていることが、想像できなかった。

歴史に「もし」はないけれど、
もしこの状況が伝わっていたら、各国は早くここを解放しようと躍起になっただろうか、
それはわからない。
誰も信じなかったかもしれない。
あまりにも想像を絶した数の人々の命が、
想像を絶した方法で奪われ、捨てられていったのだから。

「(内部で起きていたことが) 社会に受け入れられたのは最近です」
中谷さんもそう口にされていました。

事実がでてくるまでには、
それを知っている特殊任務隊の「生き証人」が
心置きなく話せるような環境の熟成が必要だったのだ。
いいかえれば、
彼らが落ち着いて話せるようになるまでの時間と
彼らの体験を受け入れられる周囲の変化、
そこまでに数十年という歳月がかかったということ。

人は、何十年、何百年たっても、戦争の体験・全貌など、明らかにすることなどできない。
ただただ、戦争でなくなった人々へ、その悔しさ・無念さに思いをはせることで、
二度とそれを繰り返さない、と肝に銘じるしかないのだ。
そして、アウシュビッツとは、そこに立つだけで、
誰もがその教訓を深く刻み付けさせられる「墓場」なのだ。

外は雨になっていました。
ビルケナウが10年間、曇り空の重苦しい雰囲気私に記憶に残っていたように、
この写真は、雨が降るくらい夕方の空と薄暗い展示室のイメージとあわさって、
私の記憶にまた残っていくのでしょう。



ガス室跡に手向かれた花 saita (c)